

多民族国家におけるエスニシティと文化的アイデンティティ

森岡 修一

Ethnicity and Cultural Identity in the Multiracial Nation

Shuichi MORIOKA

緒 言

諸民族の相互接触・交流の増大とともに、民族帰属の問題は文化的同化過程として顕在化する。本研究では、ロシアをはじめとする各エスニック・グループの文化項目における活性化を指標とした文化的同化と多様化の具体的分析を行うことによって、エスニック・アイデンティティの形成過程を明らかにする。

ソ連邦の崩壊は、すべての社会的位相においてエスニック・アイデンティティの視点そのものを改変した。それまで圧倒的優位を誇っていたロシア人の地位が当該共和国の基幹民族の地位と逆転し、ロシア人の権利保護問題が浮上するに至り、ロシア人のエスニック・アイデンティティは質的变化を見せてきている。そこで先ず、職種、性別、学歴、年齢等のインヴェントリーによってロシア人自身のエスニック・アイデンティティの具体的分析を行い、価値的指向性の特性について考察する。エスニシティと文化的アイデンティティの問題を考える場合、非ロシア人少数民族問題を考えるだけでは十分でない。今や、多数派たるロシア人自身が深刻なアイデンティティ・クライシスに直面している。そのような状況の中で「ロシアとは何か」という問題が大きく浮かび上がっているが、ここには、以下の3つの位相の問題が含まれている。①ロシア人自身が自らをどのようなものとしてとらえ、今後いかにエスニック・アイデンティティを形成していくべきか、②「外」なるものに対してどのような関係をもつか、③内なる異民族に対してどのような関係をもつか、の3つである。⁽¹⁾

次に、非ロシア共和国における基幹民族とロシア人のエスニック・アイデンティティの差異について分析する。非ロシア人のエスニック・アイデンティティに関しては、とりわけエスニック・プロセスの政治的・社会的状況においてきわめて複雑な様相を呈しているタタルスタン、トゥバ、サハ（ヤクーチヤ）、北オセチヤ（アラニヤ）などが、いずれも基幹民族とロシア人との文化接触・文化変容によって独自のエスニック・アイデンティティを形成してきた。そこでこれらの地域を中心に文化的同化過程を分析し、非ロシア人におけるナショナリズムの動態とロシア人のアイデンティティの特性を明らかにしていきたい。

社会変動と文化的アイデンティティの基層

エスニック・プロセスの問題は今やきわめて重要な局面を迎えつつあるが、そのことをデータに基づいて考察していこう。1995年夏にРНИС И Н Пが12地点で1464人に調査を行ったと

ころ、「民族性」については「民族性は自然や神から与えられたもので変えることができない」とする者が最も多く48.6%であった。次いで「民族的所属のおかげで祖国およびその歴史についての記憶が保たれる」とする者(48.2%)や「正常な人間ならば自分の民族性に誇りを持つべきだ」とする者(41.2%)が多い。また「人々を結びつけ、共通の目的に達するためのもの」と肯定的に評価する者(16.4%)がいる反面、「民族性の概念が既に失われてしまっている」とする者(11.8%)もほぼ同数おり、「人間は自分の民族性を選択する権利がある」(9.7%)とする意見以外に、「人々を引き離し反目させるようにするもの」(6.3%)といった否定的見解もみられる。新しいロシアのパスポートに民族名を記入する必要があるか、という問いに対して45%が必要ありとしているが、31.5%はどちらでもよい、23.1%は不要と回答している。「あなた自身は何に属すると思うか」との問いに、少数(7.3%)ではあるが「世界市民」と答えたいわばコスモポリタン派がいたのは興味深い。⁽²⁾また現在のロシアでは、宗教的要素とエスニシティの歴史的要素が容易に結合しやすい傾向も看取しうる。

さらに、ВЦИОМが1993年に1812人の新旧エリートに対して行ったアンケート調査では次のような結果が報告されている(括弧内は旧エリート／新エリートの%)。

民族を結びつける要因としては、「生まれ育った場所」(38%/41%)「われわれの過去と歴史」(26%/37%)「土地、領土」(12%/25%)「自分の民族の言語」(22%/19%)「国家」(27%/18%)「母国の自然」(15%/18%)「歌、祝日、風習」(14%/17%)「民族の精神的特質」(14%/16%)「自分の民族の偉大な人物」(8%/10%)「墓碑、記念碑」(8%/9%)「宗教」(3%/8%)「仕事好き、切り盛りの才」(5%/6%)「軍事力」(2%/5%)「国旗、紋章、国家」(5%/2%)が挙げられており、⁽³⁾現実にはこれらの要素が複合的に作用してエスニック・アイデンティティの基盤をなしている。

ソ連邦の崩壊については「多くの人々にとって不幸」(44.0%)、「良い面も悪い面もある」(30.2%)、「世界的意味でのカタストロフィ」(14.1%)、といった回答に混じって少数ながら「ロシアの再生や他の共和国にとっても良いこと」(5.4%)、「民族間交流にとって肯定すべき事件」(3.2%)という声があるのも見逃してはなるまい。

「あなたは今何に所属していると感じますか」という質問に53.1%が「ロシア市民」と答え「ソ連邦市民」と答えた15.5%をはるかに上回っている。またロシアは一つの家のようなものであり、いかなる民族も特権を有すべきでないとする者が73.6%の圧倒的多数を誇り、ロシア人の特権を主張するもの(13.1%)やロシア人だけのもの(8.1%)を大きく凌駕する。⁽⁴⁾

新エリートの台頭とナショナリズム

住民の66.8%はファシスト的な急進主義に批判的だが10.5%はシンパであり、7.3%はロシア民族の特別な使命を感じており41.4%はロシアの単一の国家再生を夢見ている。潜在的なロシアナショナリズム志向は強いと見てよい。

急進的ナショナリズム志向を特徴づける心理的兆候としては「ロシアは列強であり、他の諸国や民族がアイデンティティを持つようにさせるべきだ」とする立場と「ロシアは外国からの攻撃に対して威嚇すべきだ」とする考えとが融合する傾向が強く、16.3%がこのタイプであった。反欧米志向はそれほど高くなっておらず6.9%が観測されたにとどまる。とはいえこうした外的脅威を感じているものの間では強権的政治を待望する声も根強い。ペレストロイカ以降急速に台頭してきた富裕層、いわば成金の「新ロシア人」の排除(69.0%)や、「刑事的犯罪の訴訟手続きの簡略化」(46.9%)を望む声に混じって「ロシアの統一を脅かす事態を乗り越えるために軍事的手段を用いるべし」(38.1%)とする強硬論は、当然のことながら外部の脅

威を感じている層の中により顕著に現れている。⁽⁵⁾

ベレストロイカ以降生じた社会的変動について、新旧エリートに対して行ったアンケート調査を分析し、「ロシア」／「自分と自分の家族」のダイアド、「肯定」／「否定」のダイアドを組み合わせると以下の4つのカテゴリーになる（括弧内は、旧エリート／新エリートの％）。

1. 変動はロシアにとっても、自分にとっても肯定的に評価できる（47／82）。
2. ロシアにとっては肯定的だが、自分にとっては否定的（8／4）。
3. 自分にとっては肯定的だが、ロシアにとっては否定的（3／3）。
4. 自分にとっても、ロシアにとっても否定的（42／10）。

これからも窺われるようにタイプ1は新エリート、タイプ2と4は旧エリートの指示率が高く、タイプ3には差がみられない。

いくつかのアンケート項目に対する回答において、新エリート（N）旧エリート（O）大衆（M）のそれぞれのグループにおける、肯定度（+）と否定度（-）の分布は以下のようである。なお（+）（-）の付していないのは肯定と否定の中間にあるものである。

- I. 「ヨーロッパ諸国はモデルたり得ず、ロシアには独自の道がある」（+O>+N>+M）、
- II. 「連邦の拒否は政治家の大きな過ちであった」（+O>M>N）、
- III. 「ロシアのおかれている状況の唯一の活路はすべての権力を一カ所に集中させることである」（M>-N>-O）、
- IV. 「国家は商品に固定価格を定めるべきである」（+M>-O>-N）、
- V. 「外国の企業をロシアに誘致することは天然資源の流出と経済の一層の低下をもたらす」（M>-O>-N）、
- VI. 「実務家が利益を上げることで結局はすべてが得をする」（+N>+O>M）、
- VII. 「市場経済への移行はロシアが危機を脱出し隆盛するために必要だ」（+N>+O>M）、
- VIII. 「土地を私有化することはよりよい仕事への刺激剤となるために必要なことであった」（+N>+M>+O）。

ここには、旧エリート層よりも新エリート層においてヨーロッパ志向、市場経済志向が強いことが明白である。⁽⁶⁾

社会・心理学的複合としてのロシアのエスノ・セントリズムはヨーロッパの他の諸国以上に広がりを見せてはいない。対外的な仮想敵国といったイメージは以前と比較して急激に減少している。とはいえそれは過激主義が存在しないということを意味するものではない。急進的ナショナリズム、反民主制、強権政治志向といったものは対内的・対外的政治不安によって一層増幅される。

1991—1992年にエストニアとウズベキスタンで行われた調査では、連邦からの脱退に対しての制裁措置として軍事的措置を肯定する者は、ロシア人も基幹民族もきわめて少数である（いずれも6％以下）が、経済的措置についてはエストニアのロシア人で24％、エストニア人では0％の肯定率であり、ウズベキスタンのロシア人（14％）とウズベク人（12％）に差がみられないのと好対照をなしている。また非熟練労働者の方がインテリよりもこうした制裁措置を肯定する傾向が強い。

それでは、ロシア人、エストニア人、ウズベク人にとって「防衛」「民族文化」「民主制」のうちで最も重要なものとは何なのか。年次別にみてみよう（括弧内は、防衛／民族文化／民主制の％）。

- A. ロシア；サラトフ1980（78／9／14）、モスクワ1987（56／12／36）、サラトフ1991（24／

26/42)、モスクワ1992 (21/32/42)。

B. エストニア(タリン) ; 1987ロシア人 (25/22/53)、1991ロシア人 (20/35/41)、1991エストニア人 (22/27/51)。

C. ウズベキスタン(タシケント) ; 1987ロシア人 (52/11/37)、1991ロシア人 (9/27/48)、1991ウズベク人 (33/52/26)。

年次ごとに「防衛」のポイントが下がり、逆に「民族文化」のポイントが上がっていることと、「民主制」の変動が目につく。1980年代後半には「防衛」志向は徐々に「民主制」に迫いつかれ、さらには地位が逆転する。

社会階層別では非熟練労働者よりもインテリの方が、また年齢層別では高年齢層よりも低年齢層の方が「防衛」志向から「民族文化」「民主制」志向へ転換する傾向が強い。モスクワでは圧倒的多数のロシア人(64%)がかなり強いエスニックの自己意識を持っているが、3分の1は「片時もロシア人であることを忘れたことがない」グループである。

現状を改善することのできるものとして「市場」「秩序」「民主制」のうち、村落では最も「秩序」の選択率が高い。1992年のモスクワでは「市場」(59%)が最も高く「秩序」(34%)と「民主制」(35%)がほとんど肩を並べている。また専門性が高くなるほど「市場」と「民主制」の選択率が高くなる。⁽⁷⁾

1990年における社会的矛盾のうち進展したものとして「国際関係」「精神的風土の刷新(グラスノスチなど)」「経済的主導権、新しい所有関係」「内部政治的自由、民主制」が挙げられている反面、悪化したものとして「民族関係」「ナショナリズム、ファッショ的イデオロギー」「経済不振」「内部政治的攻撃的対立」などが挙げられているのは、多民族国家ロシアの永遠のアポリアをみる思いである。

政治的成層は、政治的なステータスという指標による住民の階層分化に他ならない。ニジェゴロド州の村落と首都ニージニ・ノブゴロドにおいて1995年に調査が行われた(N=1801)。分析の結果以下のクラスターにカテゴライズされた(括弧内はN/急進主義者の内数)。

民主主義者; 多文化主義・多様性を認める(151/34)、西欧主義者; スラブ主義者に対する(44/8)、実利主義者; 実利的有用性を優先(100/22)、共産主義者; 共産主義思想を信奉し実践(171/86)、民族・愛国主義者; ナショナリズム志向(302/48)、全体主義者; 無制限の国家権力志向(26/7)。

学歴との相関を見ると「リベラル」志向の高いグループは教育水準が高い。たとえば「民主主義者」には高学歴者が多く、「共産主義者」「全体主義者」では低学歴者が多数を占める。職種別でも「民主主義者」「実利主義者」においては高次資格労働者の占める率が高い。「西欧主義者」では実業家の比率が高く、「共産主義者」では年金生活者が目立つ。学歴が低い者ほど世界観が単純かつ無批判的・類型的になる傾向が顕著である。

1991年と1996年の調査を比較してみると、前者では3分の2以上が自らを中流に位置づけていたのに対し、後者では下層階級に位置づける者が激増している。さらに政治に対する共感度では、「西欧主義者」「実利主義者」を除けば否定的態度が目につく。また、たとい否定的ではないにしろ政治に対する無関心層の増加が目立つ。別の調査では、投票行動のポイントが最も高いのは「共産主義者」(70.8%)と「全体主義者」(53.8%)であり、「実利主義者」(31.0%)で最も低率となっている。年齢との相関では若年層の「リベラル」志向に裏打ちされた投票行動がみられる。⁽⁸⁾

ロシアの「ロシア問題」

1991年に「世論財団」(ФОМ)が設立され、ロシアおよび近隣諸国の政治・経済事情に関する大規模な実態調査を継続的に行っている。理事長はアレクサンドル・オスロン、調査団長はエレナ・ペトレンコ、分析センター長はイーゴリプリャムキンである。モスクワ支部では50人の専門家が調査・研究に従事しており、ロシアの18地域とウクライナ、モルドヴァ、エストニア、ラトビア、リトワニア、カザフスタン、キルギジア、ウズベキスタンに支部および協力機関を有する。そのうちの研究プロジェクト「民族と政治」はとりわけ精力的な活動を続けており、クリャムキンとペトレンコらのプロジェクトをもとに多数の研究者が参加して、政治・経済問題の核心に迫る内容を含んだ定期的なヴェレティンなどの刊行を行っている。同プロジェクトは1995年に、いわゆる「ロシア問題」に関するかなり大規模なアンケート調査を行い、改めてエスニック・アイデンティティの問題がきわめて複雑な要因を内包していることを浮き彫りにした。

まず、さまざまな社会グループの意識における民族と民族国家の形象を考察するために、「1992—1995年の国家建設における優先権に関する考え方の変化」をみてみよう。国家建設の優先権としてはA.「旧ソ連邦領の集権化された国家の再興」B.「C H F の国家間の経済的・政治的結びつきの強化」C.「固有の民族国家の強化」の3項目のうち、調査時点(1992年秋／1994年春／1995年冬)のいずれにおいてもBとCのポイントが高く、住民全体の平均でともにほぼ3割前後から4割を占めるが、Aは2割にとどまっている。

職業別では、重役・幹部、コルホーズ等の長、企業家、農場経営者、管理局員、将校、肉体労働者、コルホーズ員、経理担当者、学生、年金生活者、無職のうち重役・幹部、企業家、管理局員において特にB志向が強く出ており、C志向の強いのは農場経営者、将校である。またCのピークは1994年春で、その後下降線をたどる。年金生活者はB、Cに対しては関心が低いがA志向は強く、その傾向は調査時点ごとに高まっている。

次に「ロシア社会の職業的・人口学的グループにおける価値指向性」をみてみよう(括弧内は%)。ロシアが目指すべき価値として、住民全体の価値指向性の高い順にランク付けすると以下ようになる。1. 伝統的にロシア的なもののみ(46%)、2. ソビエト的なもののみ(16%)、3. 伝統的にロシア的なものとソビエト的なもの(11%)、4. 西洋的なものと伝統的にロシア的なもの(7%)、5. 西洋的なもののみ(4%)、6. 西洋・ロシア・ソビエト的なもの(3%)、7. 西洋・ソビエト的なもの(1%)。

これをみてもいかにロシア志向が強いかが分かるであろう。とりわけ、重役・幹部、農場経営者、将校、コルホーズ員、年金生活者のロシア志向は他の職業グループを上回っている。コルホーズ等の長が「ソビエト的なもののみ」(25%)や「伝統的にロシア的なものとソビエト的なもの」(20%)を多く選択しているのは、回帰的傾向としてまずは妥当なところであろう。

男女差はほとんどみられないが、学歴別では初等教育修了者の「ソビエト的なもののみ」(25%)の選択率が相対的に高いことと、高年齢層ほどロシア志向が高まる(55歳以上では50%)傾向が目につく。これは政治的なレベルでの思想的ナショナリズムというよりは、むしろ深層的「心性」レベルでの祖国のロシア的伝統への回帰願望とみなすべきであろう。

それではロシア人はどのような資質が「ロシア」的なものとして他の民族から自らを区別するものとみなしているのだろうか。「ロシア人を他の民族から区別する資質」として住民全体のポイントの高いランクは以下のようなものである(括弧内は%)。

1. 困難への耐性 (61%)、2. 祖国の価値あるものの保護 (49%)、3. スラブの過去、英雄的な歴史 (40%)、4. 自由・独立への意志 (30%)、5. 偉大な言語 (29%)、6. 民族的統一と団結 (21%) 国家のために個人的利益を犠牲にする用意 (同21%)、8. 真理と高次の意味への努力 (20%)、9. 特別の歴史的使命 (12%)、10. 区別するもの無し (6%)、DK (9%)。

職業別にみると、「困難への耐性」は重役・幹部 (75%)、コルホーズ等の長 (71%)、将校 (69%) の選択率が高く、コルホーズ員 (51%) で最も低い。コルホーズ等の長はまた「祖国の価値あるものの保護」(62%) に熱心であり、無職 (37%) で最低を示している。「スラブの過去、英雄的な歴史」が最も忘れたくないのは将校 (57%) であり、コルホーズ員 (32%) はあまり関心を示さない。「偉大な言語」の選択率が高かったのが将校 (42%) であったのは当然としても、学生の間でも選択率が高い (37%) ことは注目すべきである。また逆に、本来最も「真理と高次の意味への努力」に燃えていなければならないはずの学生を選択率が最も低い (9%) ことも見逃してはなるまい。ここでも男女差はあまりみられず、学歴や年齢層が高くなるほどエスニック・アイデンティティの資質に敏感になるという点で一定の相関が観察される。

さらにロシア人自身にとってどのような資質が必須と思われるかということについて調べてみよう (括弧内は住民全体の%)。

1. ロシアを愛し祖国とみなす (87%)、2. ロシア文化、慣習、伝統への愛 (84%)、3. ロシア語で話すこと (80%)、4. 自らをロシア人とみなす (79%)、5. ロシアの市民権 (56%)、6. パスポートにロシア人の登録 (51%) 両親の一方がロシア人 (同51%)、8. ロシア人的性格 (50%)、9. 正教への信仰 (43%)、10. ロシアに居住 (32%)、11. 愛国的運動への参加、共感 (27%)、12. ロシア人の両親をもつ (24%)、13. ロシア人的容姿 (22%)。

それぞれの項目における選択率で職業階層ごとの際だった違いはさほどみられないが、「正教への信仰」の指示率が年金生活者でとりわけ高い (55%) ことが目を引く。これらの調査項目においても男女差はほとんどみられない。学歴別では、高学歴になるほどそれぞれの項目の選択率が低下し、知的水準が高いものほどこれらの要件をロシア人必須の資質としてみていないことを示している。年齢別ではやはり55歳以上の選択率が高い傾向がみられる。

客観的指標よりも「・・愛」といった主観的指標が上位にあることは、ある意味で、現在ロシアにおいてロシア人そのものがおかれている事情を物語っているとも言えよう。かつて「栄光の」民族であったはずのロシア人としての自己意識の指標は、混迷を極める変動の中でその「誇り」をはぎ取られたというべきか。それまでロシア人が独占してきた特権的地位も新しいエリート層に取って代われ、ますます社会的上位グループと下位グループの差が拡大しており、とりわけ下位グループの新しい生活条件への不適応が顕著となってきた。

こうした社会変動への適応度をみるために、「ロシア居住のロシア人の状況に対する評価」をみてみよう。A. 「他の民族と比べてロシア人の経済状態はよくなったと思うか」 B. 「他の民族と比べてロシア人は現状を改善する可能性が大きいと思うか」 C. 「他の民族と比べてロシア人への無礼や差別が増えたと思うか」の問いに対して、A、Bではほぼ半数が「変わらず」としているが、全体としては「悪くなった」「少ない」と否定的評価に傾いている。とりわけ、年金生活者、無職、コルホーズ員、コルホーズ等の長、農場経営者の否定的評価は30%前後にも及ぶ。Cについてもほぼ同軌で特に農業関係者が侮辱や差別を受けることが多くなったと感じている。ただ、これらの質問項目では性差、学歴、年齢のポイントの差は比較的少ない。

最後に「ロシアの国家体における民族領土境界に関するロシア人の考え」についてみておこう (括弧内は%)。「ロシア人が公式に主要民族とされる国家を創設することについて」では、

「無条件に賛成」(住民全体の21%)「どちらかといえば賛成」(22%)と「どちらかといえば反対」(21%)「無条件に反対」(17%)と賛成がやや上回るとはいうものの、ほぼ賛否相半ばしている。無条件反対派は重役・幹部(31%)、企業家(30%)、管理局員(28%)に多く、無職(12%)に少ない。「主にロシア人が居住していた旧ソ連邦領土の併合について」に関する質問では、さすがに「併合すべし」という強硬意見は33%と「併合すべきでない」の46%に13ポイント及ばないが、それにも拘わらずこの数字は、ロシア人の潜在的願望として見逃すことのできない重みを持っている。なぜならば、性差、学歴、年齢に関係なく3割以上が「併合すべし」と回答しているからである。⁽⁹⁾

これまでも述べてきたように、現在ロシアで主流を占めている伝統的に「ロシア的なもの」への志向は、かつてのような民族的な誇りではなく何よりもまずロシア民族としての「不安」がその底流を成しているといっていよい。回帰的なアイデンティティ志向は実はアイデンティティ・クライシスの端的な徴表なのだ。その徴表は、かつての絶対的権力の「帝政」イメージによって自己増殖を続けながら他民族の同化を夢見る。だがまさにそれこそが、ロシア民族自体が他民族へ同化されてしまうことへの恐怖と危機意識に他ならない。

ロシア連邦における諸民族の自己意識

次にタタルスタン、トゥバ、サハ(ヤクーチヤ)、北オセチヤ(アラニヤ)における基幹民族とロシア人の文化的アイデンティティを対比的に考察していこう。各共和国のエスニック人口学的特性は以下のようである。

タタルスタン；基幹民族が半数を超しロシア人は40%をやや上回る。北オセチヤ(アラニヤ)；オセット人が過半数を占めロシア人は約30%である。トゥバ；基幹民族が圧倒的多数を占め64%に達する。サハ(ヤクーチヤ)；上記の地域とは逆に基幹民族は37%にすぎず、ロシア人が半数を占める(約50%)。

「民主主義」(демократия)の概念はおよそ3つの意味を持っている。第1は、価値、理念、自由・平等・博愛、国民の社会参加の同義語として。第2は、厳密に憲法的な意味で国家統治の形式として、あるいは広義には政治的国家体制として。第3は、専制政治に対する抵抗を基本的内容とする民主化運動である。「民主主義」運動の一環としてのロシア連邦からの離脱権の主権については、基幹民族の27%から38%が賛成しているが、最も急進的なのはタタール、オセットであり、トゥバ、サハはそれより低率である。またロシア連邦内での独立権の拡大を指示する基幹民族が多く、トゥバで39%、タタルスタン、サハ(ヤクーチヤ)、北オセチヤ(アラニヤ)で43—64%である。最も支持者の多かったのが「資源の管理」であり、北オセチヤ(アラニヤ)で57%、タタルスタンは64%、サハ(ヤクーチヤ)やトゥバは68%であった。つまりサハ(ヤクーチヤ)やトゥバではいわゆる「経済的ナショナリズム」が優勢である。ロシア連邦内での独立権については各共和国の多くのロシア人も支持しており、タタルスタンのロシア人では40%の支持率である。

それでは、「各共和国の管轄における力関係」はどのようなになっているのであろうか。基幹民族のおよそ3分の2が軍は彼らの管轄下におくべきと考えているが、紛争の解決のために軍事の方策を用いることについては、基幹民族だけでなくロシア人も否定的であり、交渉による平和的解決を望んでいる(タタルスタン57%、ヤクーチヤ77%)。熟練労働者と非熟練労働者との間の意見の違いをみると、トゥバ人の中では熟練労働者が経済的主権の決定的支持者であり、非熟練労働者や村落住民は概してナショナリズムの理念については関心が少ない。けれど

もヤクート人にとっては村落住民のほぼ半数が非ロシア人の管理を支持しているのである。

ナショナルなあるいはエスニックな関心といっても、一般人が個人的レベルでいつもそのことを第一義的に考えているわけではない。ただ北オセチヤにおいてだけは、日常的な平安と関わって32%のオセチヤ人にとって「政権の指導機関における自民族の生活的利益の保証」がきわめて重要なものと映っている。タタール、サハ、トゥバ人にとっては20%前後といったところである。こうしてみると一見、社会における民主化の中で個人的レベルではエスニックの関心も比較的低い活性化にとどまっているかのようだ。「民族、文化、言語の再興」に関してはどのエスニックグループも20%に満たないからである。

しかし、ロシア連邦の諸共和国の基幹民族におけるエスニックにおける関心事をカテゴリー別にみると、タタルスタン、サハ（ヤクーチヤ）、トゥバ、北オセチヤ（アラニヤ）のいずれの地域にあっても相対的に最も関心の低いのが「人権、言論の自由」であり、北オセチヤ（アラニヤ）で辛うじて10%を超している以外は5%をやや上回る程度にすぎない。次いで「政党や運動面での寛容さ」「自民族の利益に対する政府の注意」も平均して15%そこそこであることを考えるならば、「民族、文化、言語の再興」「政権機関における自民族の利益の代表権」に対する関心が相対的に高いことが分かるだろう。

これに対して、ロシア連邦の諸共和国のロシア人におけるエスニックにおける関心事を分析してみると、タタルスタン、サハ（ヤクーチヤ）、トゥバ、北オセチヤ（アラニヤ）のすべての地域で「政党や運動面での寛容さ」がトップを占めており、次いで「自民族の利益に対する政府の注意」となっている。他の基幹民族で最も関心の高かった「政権機関における自民族の利益の代表権」はロシア人においては第3位であり、「民族、文化、言語の再興」「人権、言論の自由」はいずれも10%そこそこである。ここには、かつての特権的なマジョリティグループとしてのロシア人の面影はほとんどみられない。ちなみに1994年に行われたアンケート調査で、「ロシアにとって今最も必要なのは秩序か民主主義か」という問いに圧倒的多数の76%が「秩序」と答えており、「民主主義」と答えたのはわずか8.7%にすぎない。

1970—1980年の調査では、80—90%のモルダビア、ウズベク、エストニア、グルジア人にとって「言語」が基本的アイデンティティであったが、ロシアの諸共和国ではその意義が半減してきている。タタルスタン、サハ（ヤクーチヤ）、トゥバ、北オセチヤ（アラニヤ）の諸共和国では、自分の子どもの習得言語に対する言語的選好性において、トゥバ人と各共和国在住のロシア人や村落等のごく一部を除いては、いずれも基幹民族語の言語的選好性がロシア語を上回っており、以前では考えられなかった状況となっている。とりわけ最近の英・独・仏語といった西欧に対する言語的選好性のめざましい発展ぶりは特筆すべきものがある。いずれの地域もそれらの言語に対しては8割程度の住民が自分の子どもに習得させたい言語としてあげており、就中ロシア人にとっては自らの母語のロシア語よりも西欧語の選好性が上回っているのである。

民族再興の不可欠の条件として都市部のほぼ50%、村落の44%のタタール人が「民族文化の再興と発展」を、また都市、村落どちらとも40%以上が「言語の拠り所」をあげている。また村落のロシア人においてはロシア語だけでなくタタール語も学ばせたいとする親が増えていることも興味深い。とはいえ、先端科学の刊行物などは西欧語やロシア語に頼らざるを得ない状況から、ロシア語の社会的機能分化はある意味でより先鋭化しているともいえる。サハの村落では基幹民族語の選好性が90%を超えているが、ロシア語や外国語に対してもほぼ6割の住民の選好性がみられる。⁽¹⁰⁾

ロシア連邦全体では、当該民族においてロシア語を母語とみなす住民比率（％）による言語的同化度の指標に基づいたエスニック・グループの言語的同化度は以下になる。⁽¹¹⁾

当該民族においてロシア語を母語とみなす住民比率（％）による言語的同化度

I. [0—10%] 北カフカス（チェチェン、アヴァル、オセツ、カバルジン、クムイク、レズギン、インゲーシ、カラチャエフ、アディゲ、バルカル、チェルケス、アブハジア、ラクツ等ダゲスタンの諸民族）沿ヴォルガ川下流（カルムイク）極東及び東シベリア（ヤクート、トゥバ）

II. [10—20] 中央ヴォルガ及びウラル（タタール、バシキール、マリ）南シベリア（ブリヤート、アルタイ）ロシアのヨーロッパ部の北部及び西シベリア（ネネツ、ドルガン、ヌガナサン）

III. [20—30] ウラル及び中央ヴォルガ（チュバシ、ウドムルト、コミ、ペルミヤーク）東シベリア（エヴェンキ、エヴェン、チュクチ）南シベリア（ハカス）

IV. [30—40] 沿ヴォルガ（モルドヴァ）西シベリア（ハント）北カフカス（アルメニア）

V. [40—50] 極東（コリヤーク、エスキモー、ケトおよび極東諸民族）南シベリア（シオルツ）

VI. [50—60] ヨーロッパ部の北部（カレリア、サアミ）全域（ウクライナ、ドイツ、ギリシャ）

VII. [60—70] 全域（ベラルーシ）西シベリア（マンシ）ヨーロッパ部の北部（フィンランド）

VIII. [70—80] 極東（チュバネツ ч у в а н ц ы）全域（ポーランド）

IX. [80—90] 極東（アレウト）

X. [90以上] 全域（ユダヤ）

北オセチヤにおいては、基幹民族のオセツ人がインゲーシやグルジア人との対立抗争にあってロシア人を味方と考えていたこともあって反ロシア的機運が和らいだ。また民族再興の不可欠の要素として、タタール、トゥバ人においては「宗教」の選択率が高くいずれも30%を超えているのに対して、オセツ、ヤクート人では10%前後の低率となっているが、こうした宗教的要因については既に考察したことがあるのでここでは言及しない。

エスニシティと集団的自己意識の構造

「私とは何か？」の問いに対して「私とは／＼である」と命題の形で答えてもらった回答の内容を分析することによって、以下のような自己概念の特性を明らかにすることができる。

1. 客観的特性

A. 個別的生活のカテゴリー；人物、性別、年齢、家族、職業

B. エスニック政治的カテゴリー；民族、宗教、サブカルチャー、共和国市民、ロシア市民、ソ連邦市民、

2. 主観的特性（自己評価、自己規定）；イデオロギー的性格の自己評価、肯定的・否定的自己評価と役割的性格

いずれのエスニックグループにおいても主観的性格特性よりも客観的性格特性が上回っており（客観的性格特性が約85%）、また客観的性格特性の中では、個別的生活のカテゴリーの方がエスニック政治的カテゴリーよりも指示率が高い。その個別的生活のカテゴリーの中で最も指示率の高いのが家族であり、3割前後から4割以上といった高率を占める。次いで、性別と人物が10%前後、職業はエスニック政治的カテゴリーの民族とほぼ同値で、10%そこそこの値である。その他の項目については指示率が低い。またいずれの共和国においても、基幹民族に比べてロシア人の「民族」選択率がきわめて低いことは、ロシア人のかつての栄光の凋落を反映したものを見てよからう。北オセチヤやサハでは基幹民族よりもロシア人の方が「宗教」の指

示比が高いという興味深いデータがあり、ここにもロシア人が地域への同化を余儀なくされている事情が窺われる。

エスニック政治的カテゴリーは北オセチヤの集団的自己概念で最も活性化しているが、これは緊迫した日常的なエスニック・コンフリクトの結果であることはいうまでもない。同地域にあっては、基幹民族のみならずロシア人もきわめて不安定な状況におかれているために、「民族」を初めとするすべてのエスニック政治的カテゴリーの項目が、他の地域のロシア人より指示比が高くなっている。逆に、トゥバではエスニック政治的カテゴリーの項目の選択率の低さが目立つが、これらの選択率には地域における当該民族の人口比や社会的ステータスといった要因が作用している。

「私は何か?」という問いに対して、「当該共和国の市民」であることと「ロシア連邦の市民」であることのどちらで以て「私は//である」と答えるかは、エスニック・アイデンティティの帰属意識を考える上で重要である。北オセチヤでは、基幹民族、ロシア人ともに当該共和国の市民とみなす率が高く、前者ではほぼ3割、後者で4割である。たださすがにロシア市民とみなす者は、ロシア人では5割を超すのに対してオセッット人では1割をやや上回る程度となっており、北オセチヤ在住のロシア人のロシア志向は他の地域より根強い。逆に言えば、それだけ彼らの人種の疎外感が深刻であるということでもある。

だが概して、ロシア人にあっては他の基幹民族よりも「民族的連帯」志向はさほど高くない。エスニシティの帰属意識や自己概念を考える際に重要なのは、「あなたと他の人々が同じ民族であると感じるのはどういうことによってですか」「どのような場面ではあなたは自分の民族性を最も強く意識しますか」などの回答の内容を分析することである。前者の問いに対しては、言語、文化、祖国の自然、民族的心理、歴史的過去などが回答の主要なキーワードとなるが、こうした項目を民族の連帯的要素とみなす傾向は、各共和国在住のロシア人よりも基幹民族の方により顕著である。とはいえ文化・伝統的要素の指示率ともなれば基幹民族が74%、ロシア人が62%とその差は縮まり、ロシア人の民族的伝統の誇りが根強い。最も文化・伝統的なものに大きな意義を付与しているのはオセッット人であり、「祖国の大地」と結びついたこうした要因は、ヤクート、トゥバ人のみならず、タタルスタン在住のロシア人にも見受けられるのである。また、民族性を強く意識する場面を問う後者の質問に対しては、文化（母語、国民芸術、文学、祝日）、宗教性（モスクや聖地等への参拝）、政治的行為（集会、運動への参加）、歴史的記憶などの回答のカテゴリーが考えられるが、エスニック・コンフリクトの高まっている地域ほどこれらの項目の選択率が高い。

それぞれのエスニック・グループが自分の所属する民族に対して抱いているイメージや感情を「自己ステレオタイプ」（またはセルフイメージ）とし、他のエスニック・グループに対するイメージや感情・態度の総体を「他者ステレオタイプ」（または他者イメージ）と称するならば、両者の数値を分析することによってエスニック・グループ相互間の親近性をみることができだろう。たとえば同じ人物に対する記述でも「機転のきく／ずるい」「儉約な／貪欲な」「誇り高い／尊大な」の記述では、前者の方がより好意的・肯定的であるのに対して、後者の選択率が高いほど否定的であることが分かる。民族間では、自己の所属するエスニック・グループと他のエスニック・グループのどちらに対しても、肯定的／否定的評価が相互に選択されることになる。

各共和国の基幹民族のうち「自己ステレオタイプ」（以下ESと表記）のポイントが最も高いのはトゥバ人であるが、彼らに対する「他者ステレオタイプ」（以下ASと表記）のポイン

トはESの約5分の1しかない。次いでES得点の高いのがオセッット人であるが、彼らの場合は両者の値がかなり近似して一致度が高い。ESポイントの高さでは以下タタール、サハの順であるがいずれも当然のことながらESのポイントがASのポイントを大幅に上回る。ロシア人の場合は相対的にES値が低い、中でもトゥバ在住のロシア人のESポイントは極端に低く、サハ在住ではESとASがほとんど同値である。ここにもロシア人がおかれている複雑な状況を読みとることができる。

ESとASの組み合わせは以下の4カテゴリーに類別できる。

〈Ⅰ〉. ES1+AS2; あるエスニック・グループのESと他のエスニック・グループによるAS (たとえばタタール人による自らのタタール人に対する評価とロシア人によるタタール人評価)

〈Ⅱ〉. ES1+AS1; あるエスニック・グループの典型(的人物)のESとAS (たとえばタタール人による自らのタタール人に対する評価とタタール人によるロシア人評価)

〈Ⅲ〉. ES1+ES2; 基幹民族と当該共和国在住のロシア人のES

〈Ⅳ〉. AS1+AS2; 2つのエスニック・グループのAS、基幹民族と当該共和国在住のロシア人の考え方

これを図示してみると次のようになる。

〈基幹民族〉	〈ロシア人〉
自己ステレオタイプ (ES1)	自己ステレオタイプ (ES2)

他者ステレオタイプ (AS2) ← → 他者ステレオタイプ (AS1)

ロシア人の考えと自らに対する基幹民族との考え方との対応の程度は、トゥバ、オセッット、タタール、ヤクート人によるロシア人に対する考え方との類似性が高い。と同時に、タタールスタン、サハ(ヤクーチヤ)、トゥバの基幹民族は、ロシア人が基幹民族に対して考えているよりも高い親近性を示している。北オセチヤ(アラニヤ)においてのみロシア人とオセッット人との親近度がほぼ同一となっているが、他の共和国に比べるとオセッット人の指数が低くなっているのに対し、逆にロシア人はより指数が高くなっている。この指数には、各基幹民族の「自国」在住のロシア人がその当該共和国の生活にどのように適応しているか、という適応レベルが反映している。

タタールスタンにおいては、ロシア人はタタール人のESに対応して、彼らを権力志向の強い、慎重で規律正しい市民とみている。一方タタール人はロシア人のESと合致して、彼らを率直で冒険心があり、未来志向が強い民族と考えている。サハ人もタタール人と同様、自らをロシア人と似たものとして考えている。平和愛好的で誠意があるという評価が共通しているが、ロシア人はサハ人のESと同様、彼らを慎重で権力志向の強い民族とみなしている。また、サハ人はロシア人のES同様、彼らをエネルギーで率直、冒険的で独立的であり、競争的で奔放、相互扶助的で未来志向があると考えている。

これに対してトゥバにおいては、トゥバ人はロシア人と共通した意味領域が相対的に少ない。トゥバ人のESとロシア人によるトゥバ人評価では、相互扶助的、権力志向的、の2項目が合致している。ロシア人のESとトゥバ人のロシア人評価では、率直さ、独立的、未来志向、エネルギーが共通した特性となっている。

北オセチヤ(アラニヤ)においては、平和愛好的、誠実、独立的、率直、エネルギー、未来志向的といった項目が、ロシア人とオセッット人との共通の意味領域である。ここでは、両

グループが相互に密接で活動的・独立的と感じている。ロシア人によるオセッソ人評価と、オセッソ人自身の自己評価との一致率は約3分の2である。オセッソ人自身が自己評価の際自らの特性として記述した権力志向、規律正しさは、ロシア人の方からはあまり指摘されていない。また、ロシア人のESでは有意であった共同性の無さや冒険心はオセッソ人からは指摘されていない。北オセチヤにおいてのみ、ロシア人の望ましい特性として従順、恭順が挙げられているのは特筆すべきである。同時に、ロシア人のオセッソ人評価で、すぐに群れたがる傾向と競争的、といった特性が上げられているのはロシア人の微妙な立場を示しているといえるだろう。ロシア人からの理解を深めることによって基幹民族との心理的距離が縮まっている例としては、タタルスタンやサハ（ヤクーチャ）が挙げられる。いずれにしても、こうした民族間の心理的距離は、長期間にわたる異民族の文化接触の結果醸成されてきたものである。つまりタタルスタンやサハにおいては、ロシア人の側から基幹民族の文化に適應せざるを得なかったとも言えるのである。基幹民族の間でタタール、サハ、トゥバ人のESの一致度が高いが、これは彼らがアルタイ語族トルコ系に属することによって容易に説明が付く。

サハ（ヤクーチャ）とトゥバ在住のロシア人のESの一致度は最も高いが、サハ（ヤクーチャ）と北オセチヤ在住のロシア人とは心理的距離が大きい。タタール、オセッソ、サハ、トゥバ人の間の平均的心理的距離が0.52であったのに対して、当該共和国在住のロシア人の間では平均値が0.58であった。トゥバ人と同共和国在住のロシア人との心理的距離はとりわけ大きいですが、これは1944年以降、同共和国に多くのロシア人がスペシャリストとして多数移住し、基幹民族よりも遥かに多くの特権を享受してきたことによる。

また、各共和国在住のロシア人のESにも違いがみられる。サハ（ヤクーチャ）やタタルスタン在住のロシア人では、自らを強固で相互扶助的なエスニック・グループとみなしているのに対し、北オセチヤ在住のロシア人は自らを離散的で共和国の法律で組織されたグループとみている。後者においてはまた、80%以上のロシア人が従順で妥協的と自らを規定して折り、政府に対しても譲歩的であるが、タタルスタンのロシア人は政府に対して70%が不信感を表明している。

次に各エスニック・グループにおける心理的傾向を以下の4対の指標を用いて分析してみよう。

+ S C (強い社会的コントロール)	- S C (弱い社会的コントロール)
+ S I (強い社会的相互作用への傾向性)	- S I (弱い社会的相互作用への傾向性)
C (集団主義)	I (個人主義)
+ R C (変化に対する抵抗感大)	- R C (変化に対する抵抗感小)

各国在住のロシア人の間で最も〈- S I〉指数が高いのはサハのロシア人であるが、これは彼らが同共和国において工業その他の発展に不可欠の社会的役割を果たしているという自負を持っているからである。同共和国では社会的変化に対してもロシア人の方がヤクート人よりも抵抗感が少ないが、この傾向は他のすべての共和国に当てはまる。そのことは逆に言えば、ロシア人の現状が余りにも悪いために「変化」を待望しているとも解釈できる。基幹民族のESでは概してロシア人より〈C〉指数が高く、タタール、トゥバ、オセッソで75%を超しているが、サハでは〈I〉傾向がみられる。

〈+ R C〉指数の高いタタール、トゥバ、サハの基幹民族では〈+ S I〉指数も高い。ただ、

たとえばタタルスタンのタタール人とロシア人を比べてみると、〈+SC〉と〈-RC〉がほぼ同値なのに対し〈+SI〉と〈C〉には差がみられる。やはりタタール人の方がロシア人より保守的といえるだろう。タタール人がロシア人をわがまま、冒険心といったキーワードで記述しているのに対して、自らを慎重、従順といった用語で描写しているのも興味深い。サハでも社会的コントロールと社会的変化に対する抵抗感では、基幹民族とロシア人との間に大きな差がみられるが、このことは、80%のサハ人が自らの性格特性として権力志向を挙げているのに対して、ロシア人では半数以下であることも関連している。

まとめに代えて

エスニック・アイデンティティは、おおよそ虚無派、無関心派、積極派（規範的）、過激派以下のタイプに類別できる。このうち虚無派と過激派の両極は、エスニック・アイデンティティの危機的状況といえるだろう。後者には民族的エゴイズムや孤立主義、熱狂的爱国主义などが含まれる。このうち望ましいのはもちろん積極派（規範的）であるが、基幹民族では平均して77%がこれに属し、ロシア人では86%に達している。だが民族間の緊張度の高い北オセチヤ（アラニヤ）では、オセット人、ロシア人ともに過激派の占める率が相対的に高い。

社会的距離には当然グループ間の差がみられるが、たとえば積極派（規範）と孤立主義とを比較してみると以下のようなになる（括弧内は、積極派／過激派の%）。

自民族の市民として受容（80%/81%）、隣人として（72/64）、自分の子どもの配偶者として（35/18）、自分の配偶者として（29/17）。これをみると、孤立主義者の方が後者になればなるほどポイントが急減していることがはっきりと窺える。学歴、職種、年齢といった要素がこれらには作用しており、高学歴社や都市住民、若年層には「規範」タイプが多い傾向がみられる。

ここで、「社会・経済的領域と民族間系の領域における肯定的・否定的傾向」についてみておこう。過去にはさまざまな経緯があったにも関わらず、問題は過去よりも現在、そして主として社会・経済的関係にありとするエスニック・グループが多い。しかしトゥバでは、基幹民族もロシア人も65%が民族間の否定的感情を体験している。一方、北オセチヤ（アラニヤ）では基幹民族のオセット人とロシア人の評価がほぼ一致しており、両者の関係についてはおおむね肯定的である。ロシア人にとっても否定的体験は避けることができないが、それを乗り越える方法といえば移民についての決定を受け入れることしかない。

否定的体験はどのようにして処理（克服、回避、あるいは合理化）されるのであろうか。たとえば、他のエスニック・グループからの攻撃を受けたときの対処法については、基幹民族の個人的レベルでは、サハ以外では「非攻撃的反応」が最も多く約半数に達するが、サハでは「報復」の方が「非攻撃的反応」を上回る。「抑制」は20%をやや上回る程度で差がみられない。ロシア人においてもこの傾向にはあまり変わりがない。僅かに北オセチヤ（アラニヤ）で「非攻撃的反応」「抑制」「報復」の順に入れ替わっている程度の違いがあるのみである。

民族間の相互理解の役割を果たすエイジェントを「仲介人」とよぶならば、いずれの地域の基幹民族においても積極的「仲介人」が5割以上を占める。これはロシア人もほぼ同軌であるが、強制移住させられたロシア人のみは例外で、「積極的仲介人」は4割足らずとなり、「消極的仲介人」「積極的非ロシア人」「消極的非ロシア人」「民族嫌悪」がいずれもほぼ2割近くを占めるようになる。¹²⁾

一方、非ロシア人のナショナリズムに関しては、これまで述べてきたことから明らかなよ

うに、A.「古典的」ナショナリズム (チェチェンなど。またタタールの過激な民族運動)、B.「対等的」ナショナリズム (タタルスタン、トゥバ、バシキルスタンなど)、C.「経済的」ナショナリズム (サハなど)、D.「防衛・自衛的」ナショナリズム (北オセチヤなど) が析出されたが、特にタタルスタンの一部等には、経済変動と結びついた複合的なE.「近代化された」ナショナリズム、とでも言うべき新しいエスニック・アイデンティティの基本型が観察されており、文化的同化過程に関与的であることが明らかとなった。

これまで「ロシア人」を表すロシア語は、もっぱら民族のリネージに基づいた狭義の「ルースキー」〈Русский〉が用いられ、多民族を1つの国家に包摂する「ロシヤニン」〈Россиянин〉は雅語、もしくは廃語としてほとんど用いられてこなかったのだが、最近では頻繁に目にするようになった。大口ロシア主義的なニュアンスの「ルースキー」を避け、「ロシヤニン」を敢えて用いようとする政治的配慮の背後には、今述べた非ロシア民族の新しい (ある意味では危険な) ナショナリズムの台頭が伏在しているのである。

註

- (1) 近藤邦康・和田春樹『ペレストロイカと改革・開放』東京大学出版会、1993、P.306
- (2) А.Г.Здравомыслов “Этнополитические процессы и динамика национального самосознания россиян” СОЦИС. 1996. No.12 стр.25-26
- (3) Т.И.Заславская,и.т.д.Куда Идет Россия?.Москва,1995. стр.223
- (4) А.Г.Здравомыслов “Этнополитические процессы и динамика национального самосознания россиян” СОЦИС. 1996. No.12 стр.30
- (5) А.Г.Здравомыслов “Этнополитические процессы и динамика национального самосознания россиян” СОЦИС. 1996. No.12 стр.27-28
- (6) Т.И.Заславская,и.т.д.Куда Идет Россия?.Москва,1995. стр.183
- (7) Ю.В.Арутюнян, ‘Испытание Устойчивости нового политического сознания русских(этносоциологическое исследование) ж.ЭО.,1994, No.3 стр.6-8
- (8) А.Ф.Анурин “Политическая стратификация: содержательный аспект” СОЦИС. 1996. No.12 стр.82-89
- (9) И.М.Клямкин,В.Б. В.Лапкин. “Русский вопрос в России” ‘Политические Исследования’ 1995. No.5 стр.78-96
- (10) Л.М.Дробижева,А.Р.Аклаев,В.В.Коротеева,Г.У.Солдатова. “Демократизация и Образы Национализма в Российской Федерации 90-х годов” Москва.1996 стр.263-270
- (11) Г.А.Зюганов,и.др. “Современная Русская Идея и Государство” ‘Политические Исследования’ 1995. No.5 Москва,1995. стр.31
- (12) Л.М.Дробижева,А.Р.Аклаев,В.В.Коротеева,Г.У.Солдатова “Демократизация и Образы Национализма в Российской Федерации 90-х годов” Москва.1996 стр.302-349

(附記) 本稿は名古屋女子大学教育研究所研究助成金による研究である。謝して辞としたい。